■横山源之助 ルポライター。労働運動を始め、名著「日本之下層社会」「内地雑居後之日本」によって底辺記録文学を樹立した。

よこやまげんのすけ
富山県魚津市 1871 =

富山県中新川郡魚津町で、資産家の網元と、奉公に上がっていた下女の間に、私生児として生まれ、すぐに同地の、優れた左官職人の横山伝兵衛の養子となる。

明治6年政変 1873 = 2歳

養家の実子(義妹)ゆきが誕生。
魚津の地は、源之助没後数年の米騒動の発祥の地として知られるが、もともと、周辺一帯は米の生産に適さず、毎年のように米騒動が起き、娘たちは、女工にできるか、さもなくば下女奉公といった土地柄で、少年時に、自らの出生を知るものの、それを誰にも明かせないことから、孤独で虚無的になり、実父の網元が、実母の下女を金で始末をつけたことを憤って、実父を資産家、実母を労働者とし、自らをその犠牲者とみなすようになるのは自然である一方、若いながら、昔風の職人気質を持つ真面目な養父のもと、温かく育てられ、その後誕生する一男三女の実子よりも期待をかけて育てられ、

..... 1880 = 9歳

明治14年政変 1881 = 10歳

魚津明理小学校を卒業後、近くの、醤油醸造ほかを営む裕福な商家沢田家に奉公に出され、

新体詩抄 1882 = 11歳

養家の実子(義弟)鶴之助が誕生、
読書好きで文化人も出入りし、町長にまでなる当主六郎兵衛の影響を受けながら勉強する一方、祭の山車芝居に数回出演したことが思い出になる。富山市総曲輪に、富山県初の公立、富山中学校が創立されると、
内閣発足 1885 = 14歳 渋る養父母を、六郎兵衛が説得してくれて、魚津からのエリートの最初の一群たる数人と、入学するが、
帝国大学始 1886 = 15歳 二人の友人とともに無断退学し、東京に出奔、頼る人もなく、神田の職人部落の木賃宿に投宿、その後の生き方の出発点になった。海軍を目指して攻玉社に入る友人に同調することなく、代言人(弁護士)を目指して英吉利法律学校(のちの中央大)に入学、養家からの学費も得て、熱心に学ぶうち、
国民之友始 1887 = 16歳 この年、二葉亭四迷が「浮雲」第一編を上梓。この間、小学校を卒業した鶴之助は、左官職を継ぐことなく、上京してしまうため、養父はゆきに婿養子竹次郎をとって、後を継がせることにする。

帝国憲法発布 1889 = 18歳

足尾鉍毒始 1891 = 20歳

改称された東京法学院を卒業。法律学生への過剰輩出で、何度か弁護士試験を受験するも合格できず、小説や宗教書を読み漁るようになり、下宿の向かいの川島浪速と親交して、ものにこだわらない放浪者の生き方を学び、「浮雲」に共鳴して、突然、二葉亭四迷を訪問、文学と社会問題意識の影響を強く受ける。四迷を通じて、内田魯庵、幸田露伴とも知り合うが、養家が傾いてきて仕送りも断たれ、弁護士になることを断念、東京市内各地を放浪しルペン風の生活を送るうち、「浮雲」と露伴を通じて、「放浪組の隊長」松原岩五郎と親しくなり、彼が「国民新聞」に発表していた貧民窟ルポに開眼、

日清戦争始 1894 = 23歳

{東京輿論雑誌}の論に親しんでいた島田三郎が主宰する{毎日新聞}(現在の毎日新聞とは無関係)を訪ね、記者として入社、入社早々、社員と悶着を起こして放逐されそうになったところを、四迷、魯庵の尽力で救われ、最初の連載記事「戦争と地方労働者」で、日清戦争が下層労働者にもたらした影響を冷静に分析して認められ、下層社会のルポルターージュを中心に活動をするようになる。

白馬会 1896 = 25歳

翌年にかけて、桐生足利の織物工場、郷里魚津周辺の小作人、阪神地方の工場労働者について、3度の長期間調査を実施し、それぞれルポ記事にする間、初めて佐久間貞一を訪問、労働問題で意気投合して親交する一方、下層社会の女性問題で、樋口一葉のもとを訪ねて親交を結び、斎藤緑雨との三角関係に。

八幡製鉄始 1897 = 26歳

帰京するや、高野房太郎、片山潜と手を結び、日本初の労働組合期成会結成には裏方として尽力、片山潜「労働者の良友喇撒(ラザル)の伝」の序は、鈴木純一郎を加えた4人によって書かれ、期成会の機関誌{労働世界}にも寄稿し続けていることから、労働組合を創生した最初の労働運動家であったといえる。

子規句歌革新 1898 = 27歳

ルポ記事をもとに、単行本化への著述に専念するうち、{毎日新聞}とは不和になって度々山間に隠れ、記事も書かなくなり、期成会と連携した形で{貧民研究会}を発足させるが、心身の衰えを感じるようになり、

Bushidou 1899 = 28歳

*{教文館}から「日本之下層社会」を刊行するも反響無く、続いて、{労働新聞}の社会叢書第一編として「内地雑居後之日本」を書き下ろしたところ、過労に倒れ、{毎日新聞}を引責辞任、郷里に永住することを覚悟、

ピア/国産化 1900 = 29歳

養家は没落していたため、山中の古刹に寄寓しながらも、宿場変遷や中小都市変遷に関心を寄せ、「社会復帰を促す高野房太郎らの差配で、農商務省商工局の全国職工事情調査のうち北陸一帯を受託、それを終えると、日銭稼ぎの{博文館}の日用百科全書の一編「養蚕と製糸」が刊行されるの合わせて、再び上京、期成会に復帰し、{労働世界}への寄稿も再開。治安警察法の施行によって、労働運動は弾圧され衰退に向かい、

田中正造直訴 1901 = 30歳

{労働世界}に執筆するも最終に至り、労働者の出稼のため、大井憲太郎と無人島開拓を計画して失敗、

教科書疑獄 1902 = 31歳

腕の良い左官職人に育っていた婿養子が死去、*ついに、養家は破綻し、一家の重荷が肩にかかって来る一方、片山潜と袂別して、労働運動、社会主義運動の主流から離れ、金稼ぎの文筆生活に入る。

日比谷公園 1903 = 32歳

魚津で従事した調査「職工事情」の印刷刊行に合わせるように、労働運動再興に奔走した際、構想・設計しようとした「貧民状態の研究に就て」を、{中央公論}に、3回に渡って発表、道半ばに終わったものの、完成すれば「日本之下層社会」を上回る未曾有の研究の項目を示した記念碑的なものである。

日露戦争始 1904 = 33歳

日露戦争が勃発するや、「戦争と手工業者」「戦争と貧民部落」「戦争と労働社会」「浮浪人間」と、立て続けに優れたルポルターージュを、{中央公論}ほかに発表。創刊された業界誌{東洋銅鉄雑誌}の編集長兼主筆に迎えられ、ほとんどの記事を書き、多くの知人の寄稿を得るも、業界と意見を異にし、翌年には辞めている。

日露戦争終 1905 = 34歳

引き続き、{中央公論}のお抱え作家のように、次々と執筆していくが、

満鉄発足 1906 = 35歳

生き方の定まらない二葉亭四迷が、自らの友情の結果、ついに小説に戻って、「朝日新聞」に、「浮雲」以来の第二となる「其面影」の連載開始を始め、好評のうちに終わったことを喜ぶ。{松華堂}から、6年ぶりの著書、島田三郎の序を得て、初の植民地問題を扱った「海外活動之日本人」を出版。

韓国反日暴動 1907 = 36歳

「明治闇黒史」の刊行を進め、木下尚江が{中央公論}に「明治闇黒史の著者に呈す」を寄稿、当然、序になるべきものであったが、流産してしまい、{中央公論}との関係を断つ。{平民書房}から、最初の人物評論集「怪物伝」を出版、まさに、売文のためのルポライターになってしまい、

アライ创刊 1908 = 37歳

内妻やいの間に、一女梢が誕生。「南米渡航案内」。二葉亭四迷が朝日新聞露都特派員になり、宿願の国際的活動を夢見て勇躍ペテルブルグに旅立つのを見送るが、

伊藤博文暗殺 1909 = 38歳

四迷は、不眠症に陥り肺結核となり、帰国の船中で、死去してしまう。

韓国併合 1910 = 39歳

西田長寿によれば、山路愛山や西川光二郎の富豪著作に並ぶ「明治富豪史」を出版、

大逆事件判決 1911 = 40歳

この頃、10年下で「青鞥の新しい女」尾崎恒子と愛人関係になる。かつての緊張感も消えてしまうものの、「凡人非凡人」を出版したように、歴史の陰に消えた人物、日陰の二流三流の人物、名も無い職人を取り上げようとする姿勢は変わっていない。

明治天皇没 1912 = 41歳

「植民事情の実地調査」となる、宿願のブラジル渡航を果たすが、

大正政変 1913 = 42歳

内妻との間に一男博太郎が誕生するも、帰国して「南米ブラジル案内」出版後の消息は定かではなく、

第一次大戦始 1914 = 43歳

四迷の未亡人に宛てた手紙を絶筆として、

21ヶ条要求 1915 = 44歳

東京市小石川区白山前町で、没した。雑誌{新潮}の記者として臨終を取った中村武羅夫によれば、間借り二階の六畳で、最期に、'中村君……これが、人生といふものかねエ……'と言いつたという。

知己であった内田魯庵は、1929年の{中央公論}誌上の随筆を、'人生の遍路修業者で、奇伝の一人として後世に伝えるべき'と結んでいる。自らを語らず、同郷の、後に富山刑務所長になる、3つ下の友人黒田源太郎が、1933年の「炉辺夜話」に「魚津の人が知らざる横山源之助君」以外に生い立ちを記したものが無く、天涯茫茫生他、夢蝶、漂天痴童、樹下石上人といった、どこか虚無的な筆名を用いたこともあり、忘れ去られてしまうが、戦後、「日本之下層社会」が発掘されて魅了、「内地雑居後之日本」とともに再刊され、若波文庫にも入れられる名著になる。1972年、明治文献によって、全集の刊行が始まるも頓挫、社会思想社の立花雄一編集による全9巻・別巻2の全集の発行を企画したが、2002年、3巻分を刊行したところで同社が倒産したため中断、法政大学出版局が引き継ぎ、2004年から刊行を再開、2007年に完結した。1987年、生家近く富山新金屋公園には、「社会福祉の先覚」と記された記念碑が建立され、2008年、'全集刊行によって郷土魚津にも取材した業績が明らかにされたのを機に'、没後3年に、米騒動発祥の地になった同市大町海岸公園に移設された。博太郎は7つの時夭折したが、梢は、遺言によって、尾崎恒子の養女になり、尾崎は生け花教師などになっている。